United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

杉並ユネスコ協会

第21回

広島スタディーツアー報告書

2019年3月26日～29日

主催　杉並ユネスコ協会
助成　杉並区職員組合

目次

はじめに　板倉 徳枝……3

第１章　スタディーツアー概要……4

行程、参加者

第２章　訪問先の紹介

広島平和記念資料館 …… 5
被爆体験講話 …… 6
青少年の意見交換会
平和記念公園～碑巡り …… 7
放射線影響研究所 …… 9
比治山陸軍基地、お好み村 ……10
江田島 ……11
宮島 ……12

第３章　参加者の感想

僕の広島　石野 陽大 ……13
広島を訪れた感想　今井 美佳
広島スタディーツアーを終えて　神谷 光穂 ……14
人それぞれの世界観　久保田 拓夢 ……15
桜　黒竹 聡美 ……16
過去、現在、未来　清水 英佳
明日に繋ぐ　園井 琴子 ……18
無知さを痛感した広島　竹内 しゅう……19
自己責任　西野 月 ……20
危機感　廣瀬 数寿
Remember of Hiroshima　藤原 尚考 ……21
広島で考えた世界平和　張 晨 ……23
Hiroshima Today　Evelin Taudiono
平和の風　Eric Yan ……25
これから先も平和な未来へ　Shu Ma Wa Thein …… 26
Why?Why?Why? 2019 Hiroshima　板倉 徳枝…… 27
知りたい　河野 道子…… 28
今こそチャンス！　西野 裕代…… 29

資料　敬宮愛子さまご卒業作文 …… 31
おわりに／お世話になった方々…… 32

はじめに

Since wars begin in the minds of men,
It is in the minds of men the defenses of peace must be constructed.

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない
～　ユネスコ憲章　前文より～

杉並ユネスコ協会はこのユネスコの基本理念を大切にし、青年主体の広島スタディーツアーを実施しています。　同ツアーは１９９８年にはじまり、２１年間途絶えることなく毎年実施しています。参加した青年達の数は外国人を加え２１年間で３００人以上になります。２１年間、世界では様々なことがそれぞれの年に起こっていました。災害、殺戮、まとまらない世界の会議、合意できない会議、内戦、宗教対立、テロ、戦争、戦争、戦争…。

毎年３月末に広島を訪れ、原爆資料館で驚きの経験をし、被爆者の方々からの講話で悲しみと恐ろしさを感じ、本川小学校、放射線影響研究所、江田島、等々で想像以上の衝撃を受け、それと同時に多くの学びを青年達はしてきました。ツアー中に毎晩行われる研修会は異なる視点を共有できる未来にむけた素晴らしい機会になっています。外国人を含む多くの視点を共有できることはこのツアーの醍醐味です。

本報告書では、第２１回広島スタディーツアー参加者の考え方や思いを発信したいと思っています。　読者の方々には本報告書を通して青年達の学びの成果を感じていただき、当協会の取り組みについてご関心を寄せていただければ幸いです。　なお、本ツアーは杉並区職員労働組合から長きにわたって助成金をいただいて実施されています。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

また、毎年、私たちのために広島でご尽力いただいている広島ユネスコ協会、そしてピースボランティアの橘光生さんへも心から感謝いたします。

杉並ユネスコ協会 副会長　　板倉　徳枝

第１章　スタディツアーの概要

期間	事前研修会	2019 年 3 月 17 日(日)
	広島	2019 年 3 月 26 日(火)～29 日(金)
宿泊	3 月 26 日、27 日	広島アステールプラザ 広島市中区加古町 4-17
	3 月 28 日	宮島国民宿舎　杜の宿 廿日市宮島町大元公園

参加者 （五十音順）	青年　(15 名)	石野　陽大	西野　月（報告書）
		今井　美佳	廣瀬　数寿
		神谷　光穂　(副団長)	藤原　尚考（カメラ）
		久保田　拓夢（団長）	張　晨
		黒竹　聡美（会計）	Evelin Taudiono
		清水　英佳	Eric Yan
		園井　琴子	Shu Ma Wa Thein
		竹内　しゅう（副団長）	
	付添　(3 名)	板倉 徳枝（杉並ユネスコ協会 副会長）	
		河野　道子	
		西野　裕代（杉並ユネスコ協会 理事）	

行　程			
3月26日(火)	3月27日(水)	3月28日(木)	3月29日(金)
6:45 東京駅集合 12:00 アステールプラザ到着 13:00～14:30 広島平和記念資料館見学 14:30～16:40 被爆者体験講話 青少年間の意見交換 （広島の学生15名） 19:00 夕食(自炊) 20:00 研修会	8:30 集合 9:00-11:00 碑巡り 本川小学校見学 14:00 放射線影響研究所見学 陸軍墓地訪問 市内見学 17:30 夕食(お好み村) 19:00 研修会	8:00 アステールプラザ出発 10:30 江田島見学 15:00 宮島世界遺産見学 19:00 研修会 21:00 厳島神社ナイトツアー	8:30～9:30 朝食研修会 広島市内へ移動 ・広島平和記念資料館 ・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館見学 帰京

第２章　訪問先の紹介

広島平和記念資料館

外国人が訪れる人気観光スポットで、毎年上位にランクインしている広島平和祈念資料館。2018年度は、京都の伏見稲荷大社に続いて第２位に選ばれた。私達のスタディーツアーは、まず原爆死没者慰霊碑に献花をした後、この資料館を訪れて「原爆で何が起こったのか」を学ぶことからスタートする。

資料館は、平成23年度から始まった展示物の整備期間および耐震工事によって、長い間、一部の展示しか見ることができなかったが、平成31年４月25日に本館がリニューアルオープンされ、全ての常設展示が完了している。本館に先立ってリニューアルオープンされていた東館は全面的にデジタル化され、私達はその様相に、リアルな恐ろしさが伝わりにくくなったことを懸念してきた。残念ながら、今年のスタディーツアーは本館オープン前で見ることは叶わなかったが、次のスタディーツアーが待ち遠しい。なお、本館リニューアル後の展示概要は、「原爆の非人道性、原爆被害の甚大さ、被爆者や遺族の苦しみ悲しみなど、被爆の実相をこれまで以上に伝える」と平和記念資料館から公表されている。

東館リニューアル後の目玉である直径５ｍ のホワイトジオラマ。最新映像技術によって、被爆前後の街の様子を１分半のCG映像で投影する。

原爆の非人道性を無言で伝えてきた被爆再現人形。
既に撤去され、もう見ることはできない。

被爆体験講話／青少年の意見交換会

平和記念資料館の見学後は、地下のメモリアルホールへ移動し、被爆を体験された方の話と、広島の高校生との意見交換会の機会をいただいた。広島ユネスコ協会主催で毎年実現している、当スタディーツアーの目玉のひとつでもある。

今回、被爆体験の話を聞かせてくれたのは、第９代平和記念資料館館長でいらした原田浩さんだ。講話の冒頭、『私が原爆被害の事実を伝えているのは、原爆を体験していない世代が二度と同じ体験をさせてはいけないという危機感があるため。』との言葉に、会場に緊張感が走った。終戦から 74 年経った現在、原爆体験者の人数は明らかに減っており、直接話が聞けるのも私たちの世代で最後になるだろう。

広島ユネスコ協会 亀井章会長のご挨拶

原爆投下時、原田さんは全滅全焼区域である広島駅にいたが、運よく駅舎内にいたことと、一緒にいたお父さんの咄嗟の判断で奇跡的に無事だったそうだ。その後、迫りくる火の手から逃れるために倒れている人を踏みながら逃げたという。真に迫った体験談は、まるでその場にいるかのように感じられ、一瞬のうちに生死を分けてしまう原爆の恐ろしさを私達は改めて実感することができた。現在、原田さんは実体験を後世に伝えるため、また核兵器廃絶の共通理解を広めるために様々な団体や学生らに講演を行われている。

原田浩さんの被爆体験講話

青少年の意見交換会では、広島の高校生と平和大使が 15 名ほど参加してくれた。平和に関してさまざまな意見が出た中で、これからの世代には歴史の共通認識が必要であると強く感じた。戦争を避けることは容易なことではないが、いつまでも相手国を憎んでばかりでは私達が描く『平和』に近づくことはあり得ない。しかし、戦争が人々の心に憎しみをもたらしていることを共通認識できれば、少しづつでも平和な世の中を作っていけると思った。そのためには、ひとつのことに捉われずいかに広い視野を持って歴史を見ることができるかが、今後の課題となるのではないだろうか。

平和記念公園～碑巡り

原爆死没者の慰霊と世界恒久平和を祈念して造られた都市公園。公園内には、広島平和記念資料館や原爆ドームをはじめ、被爆植物のアオギリや、原爆死没者慰霊碑、記念碑が 35 基設置されている。当時、広島一の繁華街であったこの地は、原爆で壊滅した後に埋め立てられたため、現在も地面の下に当時の瓦礫や小さな遺骨が眠っているそうだ。有名なエピソードとして、1984 年に来日したマザー・テレサは、土に眠っている人を靴で踏むわけにはいかないと言って裸足で公園を歩いたという。ツアー初日に平和記念資料館や被爆された方のお話をうかがうことで「原爆の結果」を学んだ私達は、次に「なぜその結果が生まれたのか？」を学ぶために碑巡りを行った。

島病院（爆心地）

爆心地。1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、米軍機 B-29「エノラ・ゲイ」によって投下された原子爆弾が島病院の上空約 600 メートルで炸裂した。爆心直下となったこの一帯は、約 3000 度～4000 度の熱線と爆風、放射線を受け、ほとんどの人々が瞬時に生命を奪われた。有名な外科医であった島病院医院長は出張で不在中だったため難を逃れたが、その日の夜から救護活動を開始したそうだ。後に病院を再建し、現在は島外科内科としてお孫さんが引き継いでいる。

本川小学校 平和資料館

本川小学校は爆心地に最も近い学校。当時では珍しい鉄筋コンクリート造であったため、倒壊は免れたが、強烈な爆風で窓枠は吹き飛び、壁は曲がり、4000 度の熱線で一瞬の内に 400 人の児童と先生が亡くなった。翌日から救護所となり、校庭では亡くなった方を積み重ねて焼く火が燃え続けたという。現在は「平和資料館」として被曝校舎の一部がそのままの状態で被曝の「証」として保存されている。

奇跡的に助かった生徒の居森清子さんは、原爆症に苦しみながらも、2016年に82歳で亡くなられるまで原爆の恐ろしさを伝える証言活動に取り組まれていた。

袋町小学校 平和資料館

こちらは、爆心地から 460 メートルに位置する袋町小学校。木造校舎は倒壊、全焼したが、鉄筋コンクリートの西校舎はかろうじて形を留め、被災者の救護所として使用された。その後、学校の校舎として近年まで使用されてきたが、2002 年の建て替えの際に、はがした壁の下からチョークで書かれたたくさんの伝言が現れたのだ。救護所時代に書かれた文字は、家族の行方を捜す人、自分の消息を知らせる人、54 年の時を経て現れた生々しい伝言の数々が、平和資料館として展示されている。

放射線影響研究所

原爆が人体に与える影響を研究している日米共同研究機関である。この研究所の前身は、原爆の2年後にアメリカが設立した、原爆傷害調査委員会(ABCC)だ。広島や長崎の被爆者12万人を追跡調査し、被爆者の血液や尿、内臓までも含めた膨大な資料を蓄積している。そのデータは国際的な線量基準を生み、福島原発事故の対応や国による避難指示の基準も、放影研のデータに基づいて行われるそうだ。しかし、ここでは医師の診察はあるが、治療は一切行われない。あくまでも原爆が人体に与える影響を調べるだけの組織である。その調査は70年以上もの長い間続けられており、現在も、被爆二世を含めて約5,000 人の人達が定期的に通いその身体を研究に捧げているが、ほとんどの人は放影研に通うことを伏せているという。もちろん、モルモットになるのは嫌だと、調査に応じない人達もたくさんいる。長年読み継がれている「はだしのゲン」には、ABCC 時代に行われた非人道的な調査の様子が記録されているし、著者の中沢啓治さんは、被爆された母親が亡くなった時に「内臓をくれ」と自宅にやってきたABCCに激怒したと語っている。さらに、アメリカはどんな放射能影響が出るかを原爆投下前に分かっていて、すぐにABCCを設立したと公言している。

集めた膨大の資料がどのように役立っているのか、役立たせようとしているのか、私達からは全く見えない。被爆二世への影響も、未だ持って解明できないという。そして、福島の原発事故発生時に、内部被曝を調査対象外としてきた放影研の膨大なデータは役に立たなかったそうだ。

原爆投下の背景にある見えにくい部分を知ることができるこの施設に、ぜひ足を運んで欲しい。

巨大冷蔵庫の中には、60年代から集められた約80万点の血液や尿が保管されている。

比治山陸軍墓地

放影研のすぐ隣にある陸軍墓地には、明治から昭和にかけての戦死者約 4, 500 名が埋葬されている。政府が認めた墓地ではないため国有墓地からは除外されているが、沖縄を除く都道府県別に約 3, 500 基の墓跡が整然と並べられ、一角には中国やドイツ、フランス兵士の墓もある。市街地や広島湾を一望できる比治山南側にひっそりとたたずむこの墓地を訪れると、今日の平和は多くの尊い命の上に築かれていることを実感する。

お好み村

広島県民のソウルフードであるお好み焼き。24 軒ものお好み焼き屋がひとつのビルに同居している「お好み村」という異空間がある。第二次世界大戦後、広島市の中心地にお好み焼き屋台が集まり始め、昭和 40 年にはお好み村が完成したそうで、古い歴史がある外国人にも人気のスポットだ。私達が毎年お世話になっているお店は、ビルの 3 階にある「水軍」。美人ママさん親子が目の前の鉄板で焼いてくれるお好み焼きは絶品。

江田島／海上自衛隊幹部候補生学校、第一術科学校

広島市からフェリーで約 30 分。瀬戸内海に浮かぶ美しい江田島には、海上自衛隊（旧海軍兵学校）の幹部自衛官、つまりトップエリート層を養成する学校がある。ここでは、敷地内を OB が案内してくれるツアーに無料で参加できる。威厳と歴史を感じさせる赤レンガや講堂に足を踏み入れると、自然と背筋がピンと伸びる気持ちになる。厳かな雰囲気の長い庁舎の廊下は、NHK 大河ドラマ「坂の上の雲」やドラマ版「この世界の片隅に」のロケが行われた観光の人気スポットでもある。

必見は教育参考館。入館時には脱帽、一礼し、写真撮影を禁止されている建物内には、海軍特攻隊の遺書や遺品、兵学校開校から終戦までのたくさんの史料が展示されている。特に、特攻隊として出撃した人々の遺書を読み進めていくと、誰しも戦争の愚かさに震えが止まらなくなるだろう。スタディーツアーに参加した青年達は、自分と同年代の特攻隊員の手紙からどんなメッセージを受け取ったであろうか。帰り道、みんな口数が少なく神妙な面持ちであった様子からも、それぞれが大きなものを感じ取ったはずだ。

宮島（厳島神社）

負の歴史を学び、当時に想いを馳せ、頭をフル回転させてきた三日間。スタディーツアーの最終地は宮島だ。美しく、威厳を放つ世界遺産の厳島神社を眺めながら、美味しいものに舌鼓を打ちつつ頭をリセット。夜の研修会では、歴史を学ぶことの意義を話し合った。

第３章　参加者の感想

「僕の広島」　石野 陽大

私が広島で学んだ事は、戦争をなくすという気持ちとそれに向かってどうするかです。

自分は頭は良くなく勉強もろくにできませんが、被爆者の話や小学校などを回って感じたのは一人一人が意識を変えていく事です。無くそうと想う心がみんなあれば、戦争はなくなると思います。なので、一人一人が無くそうと想う事が大切です。

私は広島に行ったことがなかったので、どういうところかは分からなかったですが、色々と回ってみて美しい瀬戸内海なども見ることができて良かったです。

「広島を訪れた感想」　今井 美佳

広島は2度目、このSTは初めての参加でした。これまでずっと楽しいよだとかすごい勉強になるよだとかそういう類の話は何回も聞いていましたが、毎年別のキャンプと被ってしまっていて参加できなかったのですが、今年こそはと思いやっとの事で参加することができました。

まず、原爆資料館は半分が改修工事で別館のみの見学でした。前回訪れた時は改修前の本館の見学をしましたが、色々と変わっていてびっくりました。まず第一印象として文字が多いなと感じました。もちろん模型もありましたが、文字の量が私のキャパシティーをオーバーしていて資料館を出る時には別の意味で疲れていました。やはり、世界遺産の原爆ドームの隣にあるだけあって多くの外国人観光客の姿が目に写りました。そのため英語と日本語の解説パネルがありました。これが文字の多さにつながったのかもしれません。私としては被曝したものの実物や当時の様子を映した蝋人形での展示の方が、よりインパクトが大きいし、言葉なんて必要ないのにと感じてしまいました。

また、この資料館に限らず我々が歴史を学ぶ上で心に止める必要があることがあると思います。歴史は全てがつながっています。限られた時空、空間、関係という歴史はないのです。しかし「教育」や「人に伝える」となると、ある

程度で様々な時空、空間、関係を区切り選別する必要があります。しかしながら私たちは「教育」や「人から伝えられた」歴史は区切られたものであるという感覚がなく、全てをその通りだと自分のものにしてしまいます。また、その歴史には少なからず選別する人の感情や意図も組み込まれています。それこそ大きな罪であり、悲惨な歴史を繰り返す原因だと考えます。

今回、４カ国の外国人とともに広島を訪れました。今までにない歴史の見方や、日本の歴史教育に対する意見を聞いた時、ふと日本の「戦争」はどこか被害者面していて、そこに対して何も感じていない自分がいることに気がつきました。韓国 ST に参加した時には「日本人はこんなにひどいことをしていたということがわかった」と言っていたものの、テレビなどの戦争特集を見ても何も感じることはありませんでした。そう考えてみると原爆資料館だけを見て、原爆ってやだね。とそれで終わってしまう怖さがあるのではないでしょうか。安倍さん日本政府の思うレールに沿って、スポットライトの当たる歴史だけを「これが全て」と思い込んでしまう自分、というのにはなりたくありません。この歪められた歴史に対し我々は、すべて疑問の姿勢をとる必要があると思います。なぜ日本は未だ結果を出していない放影研に馬鹿でかい保管のものを作ったのか。平和公園の「過ちは繰り返しませぬから」の主語は一体誰なのだろう。なぜ長崎と広島では祈りと怒りと違う感情を抱くことになってしまったのか。

私のこのちっぽけな頭で考えたことは薄っぺらで深いものではないけれど、正解は誰も分かりません。しかしそのような正解がわからない、でも誰かの心の中にある、一つの資料を違う角度からみることで新たな関係が見えてくる。これが歴史の面白さであり難しさなのだと感じました。今回の ST で訪れたところ一つひとつに対して思いはありますが、日本語が下手なので言葉にすると長くなりそうなのでこれくらいにします。団長、副団長を始め、会計の黒竹ちゃん、板倉先生、広島ユ協さん、広島の高校生さんたち、橘さん、その他この ST で出会った方々全てに感謝です。

「広島スタディーツアーを終えて」　神谷 光穂

今回私は、原爆という一つの出来事を見るうえでも、その人のいた場所や当時からの時間の流れなど様々な背景がその人の見方に影響を与えるのだということを身をもって実感した。当時から原爆と向き合い続け今も被爆体験を伝える被爆者の方、広島の学生たちと東京に住む私たち。そして、根底に私たちとは異なった歴史や文化を持つ外国人の方々。それぞれが違った角度から同じものを見て考える。それだけでなく、毎夕の研修会等を通してその考えを共有し合いそこからまた考える。このようにするうちに多様な見方にふれ、日を追うごとに原爆について考える視野が広がってゆくのを感じた。

そしてこれこそが、原爆の悲惨さや非道さを後世に残すために大切なことなのではないかとも考えた。当時の人々が実際に見た炎天下の最期や、人の上を踏んで逃げていく感触など、感覚的な体験はその凄惨さそのものであり最も伝えていかなければならないものであるが、私たちはそれを知ることはできない。しかしそのかわり、実体験を持つ人々から直接話を聞く機会とそれを客観的にみられる目、これからの非核のために自分の意思をいろいろな形で発信する可能性を持ち、それに対する期待を過去からも将来からも受けている。そしてそれは後にも先にも、今安全を与えられ生きている私たちだけだ。

そんな私たちおのおのが歴史の事実を知ることを避けず、いろいろな人から原爆体験を聞き、原爆について多面的に考えることで追体験者としての意見を持ち、互いに発信しあうことが必要だ。そうでなければ人類は核兵器の悲惨さを忘れ、また同じ惨禍を繰り返してしまうだろう。これこそが核や戦争のない将来をつくりだす手立てなのではないか。

そして、これは核の問題の垣根を越え、いろ

いろな不和の解決の糸口になるように思う。事実を知らないということが様々なうわさや偏見を生み、それが過去に差別や戦争さえ生んだ。いや、今この瞬間にも無知によって起こったいろいろな差別がこの世界に蔓延している。だから私たちはこれからも互いに問い続けなければならない。今は平和か。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」

最後に、私たちに安全を受け継いでくれた先人たちとそのもとでしか成り立たない仲間との当たり前で大切な日々、これから自分が学び続けるきっかけを作ってくれたこの経験に感謝を忘れず、どのようにすれば自分が未来の平和のためになれるか考えていきたいと思う。

「人それぞれの世界観」　久保田 拓夢

自分は今回のスタディーツアーが初めてで原爆が広島・長崎に落とされたなどの事しか分からなくて、それらを学ぶために行きました。そして、学ぶ立場と団長としての役職をしっかり出来るようにと心掛けました。

被爆者のお話を聞くと胸が苦しくなって言葉にできない感情を抱きました。文字にしても伝わることのない内容だったと思っています。原爆を落とされた瞬間の状況などのお話を聞いて言葉を失いました。殺傷能力の高いものを人間が作り出してしまい、それを使用してしまったと言う事に絶句しました。罪のない多くの尊い命が一瞬にして奪われてしまったのです。助けを求める人がいても助ける術がない程に人体が焼けていたと聞きました。もし自分がその時にその場所にいたらと考えると怖くて仕方ありません。今の世の中が平和だと感じますが、絶対とは言いきれません。世界には核兵器を保持している国がいくつかあります。その国が使用したらどうなるでしょう？？繰り返しになってしまうと思います。なので核兵器廃止運動を進めていきたいと思います。

平和記念公園にて全国から多くの千羽鶴が送られてきていて、日本全体の平和への思いをもっともっと広めて伝えていければいいかととても強く思いました。そして、日本だけではなく世界中に伝えていける様な活動を今後考えていく必要があると感じました。

多くの外国人の方も訪れていて各所の説明などをじっくりと読んでいたのがとても心に残りました。多くの外国人の方も平和を求めているのではないかと思っています。

海上自衛隊の技術学校を見学に行った際になかなか見にいくことの出来ない場所だと感じました。なぜなら自分の想像のしていた場所と違ったからです。教育参考館にて特攻隊隊として日本軍に貢献したなどと書いてあり、本当にそうなのかなと自分は思ってしまいました。その方々は本当に軍のために自分から望んで特攻したのでしょうか？？もし自分がその立場だったらと考えると、特攻隊として最後の瞬間を向かえるのは自ら望むことは出来ないと思います。家族との時間、仲間との時間をもっと欲しいと思って、いくら国の為だからといってそのようにする事はできないと感じました。しかし、自分は特攻隊の方々ではないので、本当はどう思っているのかとかはわかりません。自分が考えていることが全て正しいとは限りません。

でも一つだけ言えるのは世界から戦争を無くすことが全ての幸せを得られると思います。確かに世の中から争い事を無くすのは大変だと思いますが、それがもし無くなったらと考えてみてください。今後、血を流し争うことが無くなれば世界全体で幸せで平和な世の中を作ることが出来ると思います。

今回のスタディーツアーに行った方々と意見交換をした際にその人その人で感じたものや目に付いた場所が違ったのがとても印象的でした。自分はあまり戦争や歴史に詳しくなく今回のスタディーツアーで学んだことは多く、これから

の世界観を変えて行って頑張っていきたいと思います。そしてもっともっと広島で行われていることを日本だけじゃなく、世界中に広めていくことがこれからもっとも大切なことでは無いのかと思っています。

このようなスタディーツアーを組んでくださった杉並ユネスコ協会はじめ、 板倉ママさん、幹部の方々や杉並区職員組合の方々のおかげで素晴らしいツアーが行うことが出来ました。本当にありがとうございました。そして最後に団長としての役職をしっかり務められたかどうか不安でしたが、なんとか無事にスタディーツアーを終えることが出来ました。改めて今回のメンバーに感謝したいです。ありがとうございました！！

「桜」　黒竹 聡美

過去の悲劇学び、平和とは何かを考えるきっかけを与えてくれる広島スタディーツアー。6度目の参加となる今回、「5度の参加経験があるからこその気付きを探す」というテーマを個人的に設けていた。今回の広島スタディーツアーの内容に関しては、他の参加者の文章で説明があると思うので、私の文章では割愛させて頂き、個人的に設けた「5度の参加経験があるからこその気付き」について述べようと思う。私が6度目にして得た気付きは「桜」である。それは、時代が変われば同じ「桜」という花であっても、人々の目には違って映るのだということを初めて知ったからである。

初めに「桜」を感じたのは、平和記念公園公園だ。広島滞在中に平和記念公園を通ると、お花見を楽しむ人々を見かけた。死の歴史を持つ土地の上でお花見をすることに違和感を感じる人がいるかもしれないが、近年の広島では、お花見を自重する風潮は緩和され、多くの人が広島の桜を楽しんでいる。その光景が私の中ではとても印象に残っていた。

次に「桜」を感じたのは、第1術科学校の教育参考館だ。神風特攻隊に任命された若き青年たちが、親に宛てて書いた遺書には様々な詩が添えられていた。それらの詩の多くに「桜」が用いられており、桜の散る様子に自身の命の終わりを重ね合わされている。教育参考会館で展示されている遺書の中に

「山櫻　散り行く時に　散らざれば
散り行く時は　すでに去り行く」

という詩を残した青年がいた。私はこの詩に酷く心を痛めた。目前に迫っている死に対する覚悟と、その死が有意義なものであると信じて疑わない心が感じられたからである。

いま、我々は「桜」を見て何を想うだろうか。

今回の広島スタディーツアーを機に気付きを得た今、「桜」を「綺麗だな」という一言だけで済ませていたかつての浅はかな自分に怒りを覚えた。

「過去、現在、未来」　清水 英佳

行きの新幹線の中で窓際に座り、遠くの景色をずっと眺めていた。京都を過ぎたあたりから徐々にトンネルが多くなった。小学生の遠足に行くわけじゃないと自分に言い聞かせながらも、新幹線から見えた景色にかなり興奮していたことを覚えている。もちろん、学びに広島に行くのだから何らかの衝撃を受けるであろうと予測はしていた。

人生で初めて広島に降り立った。大阪から先は全く行ったことがなかった。普段、東京で生活しているので広島で見る景色は、自分の先入観もあるのか、とても新鮮に感じた。ホテルに着き荷物を預けて軽く自己紹介をした後、平和記念公園に向かった。ついに、広島スタディーツアーの始まりだ。

元安川川沿いに座りみんなでお昼を食べた後、原爆資料館別館を見学した。主に写真や原爆の説明や当時の状況など様々な知識が資料として

展示されていた。前回この資料館に来た方々にこのような物が展示されているということは予め聞いていた。資料館を見終わった後、私は少し違和感を覚えた。それが何なのかはその時はまだよくわからなかった。資料館を見た後、私たちは実際に被爆された館長の原田さんの話を聞いた。話の序盤は私の知らないいろいろな知識で溢れていた。私は一語一句漏らさずにメモを取ろうと必死だった。しかし、ある時だけ私はメモが取れなくなっていたことに気づいた。その時とは、原田さんが自身の体験を語ったある一時だった。自分が父と逃げる中、ほんの数分前まで生きていた人々の中を走り去っていくときの足の感触、子供に水をもらおうと母親が手を伸ばし、皮膚が焼けて筋肉が見えている手で自分の足を掴み、後ずさりしながらその手を解いた時に残った筋肉の一部。何とも言えない、怒りでも、悲しみでもない、本当に言い表すことのできない感情を自分の中で感じた。この文章を聞いたとき、私は何とも言えない、言葉にはできない衝撃を知った。同時に感情を的確に言い表すことができる言葉は本当に少ないと、言葉の狭さを改めて知った。

ホテルにつきみんなでカレーを食べた後の研修会。それぞれいろんな思いや感じたことを次々と意見しあった。1日目ということもあり、感じたことを表現するのはなかなかに難しくはあったが広島や原爆に対する思いを言うことができた。研修会を通して疑問に思うことがあったので橘さんにお話を伺うことにした。日頃から自分の考えや葛藤をそのまま語れたり、自分の思いを正面から受け止めてアドバイスをしてくれる相手がなかなかいないという環境で過ごしてきたので、このような機会は自分の中でとても貴重なものとなった。

前夜に考えすぎてしまったせいもあり寝不足で冴えない中、2日目が始まった。 最初に平和記念公園に向かい平和の灯と原爆の子の像を巡ってから 碑を巡った。その後、 爆心地からほど近いところにある小学校、本川小学校を見学した。 小学校の敷地内の中には 平和資料館があり、当時の本川小学校の原爆投下直時の模型や 写真などが様々展示されていた。その中でも、特に目を引いたのが、燃え盛る炎を再現した作者不明の絵。その絵の中の炎は黒かった。赤でも橙色でもなく、黒かったことに衝撃を覚えた。衝撃を受けた中、お昼休憩のため次の地へと向かっているとブラジルからの留学生のエリックが話しかけてきてくれた。バイキングのおいしいお昼を食べるまでの間、二人で広島に関する色々な考えやお互いの意見を話し合った。意見がられることもあったが、自分一人の視点で考えが固めないこと、いろんな意見が出てくるところがこのスタディーツアーの醍醐味だと感じた。昼食後、私たちは陸軍墓地に向かった。そこには様々な墓地があったが、亡くなってもなお位が決められているのかと思うと何とも言えない気持ちになった。また、その事が他人事のようにも思えて自分自身にも悄然とした。同時に一日目に感じた違和感、何を見たり聞いたりしてもどうしても他人事のように捉えてしまう自分の中の冷たい部分が見えて、少し嫌気がさした。

二日目の研修会ではみんな慣れてきたのか、いろいろな意見が出た。その中でも、歴史の共通認識は重要だという意見が多く挙がった。

二日目は全く知らないことを吸収することが多かったので当然のことながら一日目以上に疲れてしまったのと同時に、自分の知らないことを知るのはどんな形であっても楽しいと感じた。三日目、過去二日間とは打って変わってかなりアクティブな一日となった。ホテルを離れ、フェリー乗り場へ。お昼を挟んでから江田島その後、宮島へ。宮島につく頃には、みんな疲れ切っていたが夜のナイトツアーではこれ以上ないくらいに楽しんでいた。

最終日の四日目、３０分ほど時間があったので原爆広島死没者追悼平和祈念館に行った。館内を巡っている中であることに気づいた。これまであまり意識はしていなかったが、かなり外国からの観光客が多いと感じた。そこで私は何人かの外国人に、広島に関することや観光の目的などを聞いてみることにした。ある人は、パールハーバーも悲惨な出来事だったけど広島の原爆はeven worse だといい、またある人はただ観光で来たのであまりわからないと答えた。

どんな形にせよ、実際に広島に来て、何かを見て、感じて、学んでくれているというのはなかなかにすごいことで、これが歴史に関する共通認識の第一歩なのではないかと感じた。

家に帰って最初の１週間、広島のことばかり考えていた。それくらいこの広島スタディーツアーは自分自身にとってとても大きなものだと思った。それと同時に、この先この経験を今後の人生にどう生かしていくかという課題も見えてきた。何にせよ、とても有意義な四日間だった。

「明日に繋ぐ」　園井 琴子

この度第２１回広島スタディーツアーに参加できたことに大変感謝致します。このスタディーツアーは深く、大切な経験となりました。

私が広島に行ったのはこのスタディーツアーが最初です。あの原爆ドームを初めて自分の目で見ました。思わず目をみひらきました。原爆死没者慰霊碑の近くから見たので少し遠くに見えましたし、テレビで見たことがあると言えど、実際に原爆ドームを見ると、この地に来たのだなという実感と建物だけではあるけれど原爆の恐ろしさ、残酷さを感じ、大きな衝撃を受けました。

このツアーで見たこと、聞いたことはどれも想像を越えるものばかりでした。その中でも被爆者の原田さんのお話は深く心に刺さりました。被爆体験を語ることのできる最後の原爆資料館館長ということで、自身の体験を伝えようという思いが強く伝わってきました。広島に行くのが初めてだった私にとって被爆体験を聞いたのも原田さんのお話が初めてでしたが、本当にありのまま体験したことを語っていらしたのだろうと思います。何にも包まずそのままに。聞いているだけでもとても怖かったし一つ一つの言葉に重みを感じました。もう二度と同じ思いをする人がいないようにということばに復讐等という思いは紛れもなく、平和な未来を願っていることに感動しました。とても貴重な体験をさせていただいたなと思います。

そして、このツアーに参加して強く思ったことは、本当のことを正しく知らなくてはならない、ということです。原田さんもおっしゃっていましたが、原爆の恐ろしさも言いようによっては夢物語に変えられてしまう、とても恐ろしいことだと思います。正しく伝えられなくてはまた同じ過ちを繰り返してしまうかもしれなのです。私自身もこのスタディーツアーに参加していなかったらきっと一生被爆体験者から直接お話を聞くこともなかっただろうし、原爆の本当の恐ろしさを知らぬまま大人になっていただろうと思います。過ちを正しく知らない限り前には進めないし、また誤った方向に進んでしまうものです。勉強だって歴史だってそれが個人の問題か、国家、世界の問題かなんて関係なく、本当のことを正しく知ることが大切だと思います。正しく知ることは過去に対する世界の共通認識を作ることにも繋がります。

このツアーに参加した私たちの使命は「二度と戦争をしない世界を作る」ことです。そのために今すぐに私にできることと言えば、このツアーで学んだことをより多くの人に伝えること。そしてもう１つ、伝えなくてはならないことを伝えることです。しかしその事をひとり誰かに話したとしても理解のある人ならともかく、大抵はそんなことがあったんだね、と言ってそこで終わってしまいます。そうならないためには今私たちが生きている平和な環境が尊いものであることに気づいてもらう必要があります。このツアーを自分にとって更に価値あるものにするために自分の学びを伝えたいです。未来に感謝される学びをしていきたいです。

「無知さを痛感した広島」　竹内 しゅう

初めての広島、初めて見る資料館と原爆ドーム、初めて聞いた被爆体験、初日は言葉が出ませんでした。
普段から真面目に勉強をするタイプではないので、行きの新幹線の中で第二次世界大戦、広島の原爆について調べノートに１ページほど書いていました。
その１ページなんて多くの情報の１ミリ程度にしかならないくらい、自分の知らなかったことばかりでした。たくさんの情報を頭の中で整理するのにいっぱいいっぱいで頭も胸も痛くなりました。

被爆体験者のお話、広島の高校生との討論会で、なにか質問はありますか？って言われても、何も出てこないし考えることすらできませんでした。何も知らなかった自分が、今ですら無知すぎる自分がなにか言っていいのだろうかとすら思いました。討論会で広島の同年代の子たちが自分たち以上に考えをもっていて、それが少し悔しかったし、無知な自分が恥ずかしかったです。

二日目からは初日に比べて情報をすんなり受け入れられるようになりました。それと同時に悲しみなのか怒りなのかわからない感情が生まれました。実際に数十年前にあったことで、たくさんのっていう言葉じゃ表しきれないほどの数の方々が亡くなって、しかも天災ではなくて、同じ人間が開発したもので、、そう思うと不思議だしすごく怖かったです。今までは戦争を単なる過去としてしか捉えられていなかったけれど、それは今自分が平和な環境の中で暮らせているからだけで、たまたま平成に生まれてたまたま日本に生まれて、すべてがたまたまなだけで、もし８０年前に生まれていたら、もしまだ戦争紛争が続いている国、地域で生まれていたらと思うと、本当に他人事ではありません。

学校ではテスト勉強のために覚えていた歴史も、いい点数をとるためではなくて、その過去の出来事から学ぶべきことがたくさんあったんだと気付かされました。

毎晩、外国人がたくさんの質問をしていて、言語も文化も違う外国人が他国の歴史を学び、自分以上に深く考えていて、自分はこれでいいのかな？と思いました。けれど深く考えられないほど自分の無知さを痛感して、もっと勉強するべきだと素直に思えました。勉強はあまり好きじゃないし好きになれそうにもありませんが、そう思えるようになれてよかったです。

小学生の頃、自分で少年兵について調べたり本を読んだりしていたけれど、たくさんの情報を知れば知るほど、終わりがない気がして、自分がなにかしても解決しない問題な気がして、そこから遠ざかっていました。しかし今回実際に広島に行って自分の足で資料館周りを歩いているとき、自分が今歩いてるちょうどこの場所は焼け野原で死体が重なっていて、そんなこと想像すらできませんでした。それと同時にそんな焼け野原が数十年でコンクリートに変わっていて、広島自体が美しい街になっていて、当たり前のことなんだけど数十年の進歩に驚きました。でもそれは広島に限らず自分が住んでいる東京にも言えることで日本全体に言えることだと思います。便利になって住みやすくなって、平和な世の中、安全な日本に見えるけれど、数十年前に日本は戦争をしていた国だったのも、世界で初めて原子爆弾を落とされた国だったのも事実です。戦争によって罪のない多くの人々が亡くなったのも、そして現在でも戦争・紛争を続けている国があるのも事実です。そう考えたとき、その事実を知らないよりは知っているほうがいいし、どんなに小さなことでもやらないよりはやるほうがいいと思えました。そして本やインターネットで知ることよりも、現地へ行って感じることの大切さを感じました。
だからこそ私はこれからも杉並ユネスコの青年部として活動していきたいし、来年も広島へ行って学びたいと強く思えました。

「自己責任」　西野 月

今回で広島スタディーツアーへの参加は３回目だった。家に帰り、日常に戻ると「広島に行った」と感じ、改めて平和について考える。今まではそうだった。しかし今回はなぜか、帰ってからも広島に行ったという感覚はなかった。

「広島」という地は、戦争の悲惨さを語り継ぎ、平和を訴えてきた。実際に、広島原爆資料館や平和公園はそのためのものだし、歴史を学ぼうとこの地に訪れる外国人は年々増えているような気がする。

だが、２日目。印象的な出来事があった。陸軍墓地に訪れた時だ。ある看板が目に止まった。亡くなった陸軍の人が、鉄砲で撃たれてもなお立ち上がり、国のために最後まで戦ったという看板が。ラッパ兵の美しい死についても書かれていた。「亡くなった」人々が、「国のために勇敢に戦って散った」人々に置き換えられた、そんな印象を受けた。この陸軍墓地、とても観光客がこぞって訪れるという場所ではない。山の上にあり、わざわざ行く人がいるのだろうかと疑うような場所だ。私は、この看板に違和感を覚えた。今までもあったはずだ。しかし今回、なぜかその書き方が気になった。また、宮島でもそのようなことがあった。商店街の何気ないおみやげ屋さんに「特攻」「神風」のはちまきが売っていた。それも１つではなく、どこの店にも売っている。確かにジョークとしては面白い。ネタにはなる。しかし、「広島」という地でその商品を売るのは、どうなのだろうかと疑問に思った。「広島」という地が、原爆を落とされた「広島」の意思が、揺らいでいるように感じた。だから広島に行ったという感覚がなかったのではないか。

決して、広島だから売ってはいけないというわけではない。だが広島という地には、原爆が落とされたくさんの人が亡くなったという過去がある。そして多くの人々が体内被曝や後遺症に苦しんでいるという今がある。そんな広島の地に訪れた観光客が広島の「平和を願う」という意志を誤解するのではないか、そう思ったのだ。

令和になった。これからは、自己責任の時代である。インターネットが完全に普及し、誰もがどこでも情報を受信し、また発信できる時代になった。テロや過激派集団の構造は組織的から自由参加に変化したと感じている。誰もが思い立ったらテロ組織の名前を使って活動できる。自由だ。だからこそ、自己責任の時代ではないだろうか。高校生であっても、たとえ無力と思えても、できることは必ずある。女子高生一人の力で原爆ドームが残ったように、私たちが令和の時代を切り開いていくのだ。

「危機感」　廣瀬 数寿

もう６回目の広島になりました。

この６回の広島ツアーの内容ははっきり言って、見学する場所も泊まる場所も変わっていません。じゃあなんで６回もわざわざ遠い広島にまで行き、戦争の負の部分を見に行くのか、その理由を今回は話したいなと思います。

はっきりと言って、広島に楽しみとしていくのだったら、広島の原爆資料館に行く意味などありません。そんなところに行くのだったら、広島カープの観戦に行き、広島お好み焼きのおいしさを発見し、秋の厳島神社の美しさに感動するそのほうが100倍面白いです。

杉並ユネスコ協会の広島スタディーツアーでは、そうはいきません。真っ先に原爆資料館に行き、被爆者の方々の原爆体験を聞き、現地の高校生たちとディスカッションをします。その後、なぜか持ち込んできた米を炊き、カレーを作ります。腹ごしらえをしたら、研修として今日見てきたことについて話し合いをします。その話し合いに大人も外国人も入ってとてもスタディーというよりか、自分の意見のぶつけ合いのような状態でこんな密度の濃い雰囲気は他で

は味わえません。そして2日目には記念碑巡り、ABCC、本川小学校見学などまざまざと原爆の現実を見せつけられます。そしてやっと3日目に厳島神社に行けると思ったら、その前に江田島で海軍士官学校の見学が待っています。

簡単な流れはこのようになっています。参加する前の私だったら、なんでこんなお勉強だらけの広島になんか行かないといけないのだろう？ましてや原爆という内容を知れば知るほど悲しくなって暗くなる話をわざわざ？と思い避けていたと思います。

でも私は広島スタディーツアーに社会人になっても参加しています。

戦争の悲惨さを知らない自分に対しての危機感、被爆者の原爆体験を伝える担い手が少なくなっている危機感、日本よりも海外の方々のほうが実際の原爆に対する関心が高いということへの危機感、社会人、そして教育者として平和教育をしなければならないので何もできていないことへの危機感。日本全体がどのように原爆を考えているのか、平和記念資料館がリニューアルされることで、日本全体が戦争に対して肯定的な考えになってしまうのではないかということへの危機感。

行くたびにいろんな危機感を感じています。この危機感は日本の平和を考えるうえで一番必要なものです。平和というものは上から降ってきたものではなく、様々な試練から人類が勝ち取ってきたものそれを忘れずに今後も平和への道を考えたいと思います。

今回の広島は2日間という短い期間での参加となりましたが、最高に楽しかったです。27のおっさんに対して快く話してくれた久保田団長、広島に初めての参加とは思えないほどポテンシャルを秘めた高校生たち、成長した大学生たち、わざわざ参加してくれた外国人のみんな、安定の黒竹ちゃん、そして最後に直前でいかないって言っておいてやっぱ参加しますと超わがままをいっても許してくれた板倉先生、西野さん、河野先生本当にありがとうございました！

※絶対リニューアル後の平和資料館に足を運びたいと思います。

「Remember of Hiroshima」　藤原 尚考

この度は青年部またカメラマンとして広島スタディーツアーに参加させていただき多くの写真を撮り多くのことを学びました。事前知識と広島で実際に聞いたことを照らし合わせると全く違うことや勘違いをしていることがありもっと勉強をするべきだと強く思いました。初日に平和記念公園と平和記念資料館を訪れました。平和記念公園では黙祷をして平和記念資料館では広島で原爆が落とされたあの日や当時の被害状況、原爆の仕組みや当時を描いた絵や写真があり心を奪われるものばかりでしたが以前から来ていた人にとっては改修工事あとはあまり展示しているものが変わりすぎていてあまり直接感じるものはとても少なくなったとの意見を聞きました。館内に展示してあった腕時計が当時のその時で止まっていてその当時をよく語っているものだと思いました。あと焼けた服などがあり痛々しい当時の状況などを見て感じることができました。また本館の方は工事で立ち入れないエリアがあったので今度来た時に行ってみたいなと思いました。見た後には被爆者である原田さんのお話や広島の学生さんたちと意見交換などをしました。原田さんのお話では話からあの日の広島を思い浮かべることができるような感じがして戦争の悲惨さと生き延びることの過酷さを心の中で感じ取ることができました。広島の学生さんとの意見交換では広島の学生さんが知っていることと東京の学生が知っていることは殆どに違いがあり東京の学生はあまり知らず広島の学生さんの方がよく知っていて認識の違いがあることに私は残念に思いました。私たちは学校では学ばないので自らが学ぶようにしたいです。2日目は朝から平和記念公園に行きそこから数々の石碑を見た後に全国から集まった千羽鶴を見てみんなの広島に対する思いが伝わってきました。千羽鶴は増え続けているの

で再生紙などの再利用をすることを知りました。色々な石碑がありその中には韓国人の被爆者の方々の石碑などがあり少々驚きました。その後に行った本川小学校では原爆による熱線で焼けた校舎が一部残っていて資料館として学校の中にあり凄いなと思いました。本川小学校は爆心地からとても近いので残っていただけでも凄いなと大きく感銘を受けましてた。そのあと暫く歩き比治山へ向かいました。ちょうど桜が道行くところに咲いていて春を感じました。そして最初に陸軍墓地を訪れました。そこには墓石がずらりとら並んでいてそれぞれどこの県出身なのか分けられていて関東地方の方々も戦争に参加されていて驚きを隠せませんでした。その後放射線影響研究所を訪れて施設ができた経緯や放射線と原爆の関わりなどについて学びました。驚くことに今でも被爆者の方やその繋がりがある人の血液検査等が行われていて驚きを感じこのような現状があることを知りました。1年の間に2回ほどは行かないといけないらしくそれはモラル的にどうかと思いました。また血液を今後の研究の為に冷凍保存しているというお話を聞いてそれは保存しきれるものなのか疑問に思いました。私は放射線については前々から学んでいることがあったのでその施設で詳しく何が行われているのか深くは知ることはできませんでしたがもっと施設を見たいなと思いました。その後は広島市内へ向かいました。途中で旧日本銀行に寄りましたが残念ながら金庫は見れず、代わりに袋町小学校へ行きました。そこには壁に伝言板の代わりとして書かれた人の名前や安否状態が壁に書いてありました。はっきり残っているのもあり爪跡を感じることができました。その後水軍というお好み焼き屋へ行き本場の広島お好み焼きを食べることができてとても嬉しかったです。今までイメージしていたお好み焼きとはかなりかけ離れていました。3日目は朝早くに出発をにて路面電車と船を乗り継いで江田島へと向かいました。船に乗っていると軍艦とすれ違ったりしてとても楽しかったです。間も無く江田島に到着しバスを乗り継いで海上自衛隊幹部候補生学校、第1術学校へ行きました。そこでは学校構内に西洋建築を施したレンガ作りの建物が多く並んでいました。幹部候補生学校校舎もレンガ造りでとても素晴らしかったです。教育三号館では第一次世界大戦や大平洋戦争などについての展示があり風刺画であったり当時を描いた絵などが印象的でした。個人的に気になったのが東郷平八郎がロシアのバルチック艦隊を破ったことが大きく展示されていて今でも思い出すだけでも凄い人だったんだなと思いました。また大平洋戦争の所で兵士の名前と年齢が書かれている物を見たらなんと自分の今の年齢とあまり変わっておらずとても驚き今自分がいることがどんなに素晴らしいことなのか実感しました。出たところに戦艦大和で使用していた実弾や潜水艦などが置いてありすごく大きいなと思いました。気を取られつつ船着場で船に乗り広島港に戻り昼食を取り宮島へと向かいました。穏やかなクルージングでしたが潮風は強かったです。周りの景色に気を取られているとすぐに宮島に着いてしまいました。船着き場を降りて出たところに鹿が普通に歩いていて奈良公園とは全く違っていて宮島全体に鹿がいました。鹿が人に馴染んでいる感じがとてもおもしろかったです。その後に厳島神社へと向かいました。まず最初にあの有名な鳥居が見えてきてその時間はまだ満潮だったので鳥居の近くまではいけませんでした。厳島神社で参拝やおみくじを引いた後に宮島のメインの商店街を歩いてみると沢山のお土産屋や食べ歩きのできるお店などもありまた。私はそこで広島で有名な牡蠣と揚げたもみじ饅頭などを食べました。牡蠣は初めてでしたがとても美味しかったです。また揚げたもみじ饅頭もとても美味しかっです。あと大体のお店は17時で閉まっていて驚くばかりでした。泊まる宿の杜の宿に着き荷物を置いて研修会をしてからナイトウォークをしました。厳島神社の鳥居の近くまで行くことができ人も少なく綺麗な鳥居が目の前に現れていました。実際に近くまで行ってみると中々の大きさに腰を抜かしそうになりました。宿への帰り際に夜桜を見れてとても綺麗で美しかったです。そして迎えた最終日は宮島からジェット船に乗り原爆ドームの近くまで向かいました。海から運河に入るタイミングで速度が落ちて外に出る

ことが可能だったのでデッキへ出て川から原爆ドームを撮影しました。そして船を降りて平和記念公園まで行きそこで僕たちは飛行機に乗る為に別れました。空港に向かわないといけなかったので早めに別れて向かい無事羽田に到着しスタディーツアーを終えました。今回のスタディーツアーを通して原爆が落ちたあの日について、かつての歴史などについて多くのことを学ぶことができました。また誕生日を広島と宮島で迎えることができてとても嬉しくまた来年も参加しようと思いました。今回学んだことを生かして未来へと繋げていきたいです。また原爆などがあった過去を風化させずに未来に感謝される様な過去になりたいです。スタディーツアーに関わった方、立花さんなどお話をしてくださった全ての方々にお礼と感謝申し上げます。

「広島で考えた世界平和」　張 晨

今回、杉並ユネスコに参加させていただき、広島にいる四日間で平和ツアーについてたくさん勉強した。私が感じたのは、世界平和が一番大事なことだ。最初の１日は、広島市の現地に行って、実際に原爆ドームを見たり、原爆で被爆した小学校を見学したり、当時原爆に遭遇した人の話を聞いたりして、非常にひどい状況を知った。また、罪のないたくさんの命が失われたことに対して、歴史に対して不理解であった自分に気づいた。しかし、この四日間の後、歴史もすでに過去のものであると感じた。いいでも、悪いでも、しょうがないものでもないと感じ、それより重要なのは、二度と歴史を繰り返さないこと。だから、歴史についての勉強はとても大事だと思う。しかし、夜の反省会を聞いていると、現在の日本の学校では歴史について強調する学校もあるけれど、興味がないと言っている学生の数が増えたように感じた。私の国、中国でも同じ感じだ。歴史はただテストのためにみんな勉強しているものだ。本当に興味を持った人たちの数は少ない。しかし、自分の国の歴史も分からないのは、非常に恥ずかしいことだと、今回のツアーで分かった。

また、歴史は従来単独で存在するものではないと私は考える。自分の歴史を理解した上で、他国の文化や歴史について理解することが必要だろう。違う視点から問題を見るから、たくさんの意見や解決案を出しやすい。一方、勘違いや誤解されることもあるかもしれない。その時は、お互いの立場で考える必要があると思う。今回の反省会でみんなは自分の考え方をシェアして、たとえ、違う視点があっても、歴史に触れてセンシティブなことがあったとしても、お互いの気持ちを交流させていたら、共感を持てるようになったのがとても良かった。

最後に、杉並ユネスコのみなさんに感謝したい。たくさんお世話してくれて、とてもありがたい。また機会があれば、是非私も参加させてください。

「Hiroshima Today」　Evelin Taudiono

This was my first trip to Hiroshima. I feel so satisfied and enjoyed the trip with the members. From the first day until the end of the trip, I got a lot of new experience and knowledge . I should be thankful to the teacher and UNESCO members for teaching and making me to know many of the historical period in Japan after or before the wars.

Day 1 The monumental events

The first place that we visited was Hiroshima Peace Memorial Museum. We offered flowers at the peace memorial park. The first word that I saw near the beside of the monument was “Please sleep peacefully”. Actually from the first day of my trip, I feel so many confusing sad feeling. I ever read at the

history book that Japan was bombed after the wars. But I never felt this way when I just saw the book. In the reality, I went to Hiroshima and saw many places. This scene touched my heart deeply that we never can be learned by only reading book. After that, we went inside the museum, I saw many words written and there are some pictures of the past moment that pictured the situation after the war. I don't have a chance to feel and see all the things there. So we decide to come back again. I also have a gratitude to hear one of the atomic bomb victims (Mr. Harada) in Japanese. It's a rare opportunity to hear the speech by atomic bomb victims who have impacted by the bomb but they still remember it clearly how the day was. I am shocked by the speech because he said it clearly how the mysterious hot ball once fall down to Hiroshima. At the evening, I met Mr Tachibana (teacher). Unesco members discussed many things about how America can make an atomic bomb and what the component of the bomb was.

Lesson I learnt: Never forget the big history in Hiroshima to see it happen twice.

Day 2 The tragic feeling

I wake up early to prepare things to see, learn, and feel. We went to the surrounding for monumental museum with Mr Tachibana and UNESCO TEAM. We touch the ground where the bomb was exploded at the epicentrum point. Mr Tachibana explained to us many things on how Hiroshima city look like before the bomb was exploded here. At this time, the epicentrum point in Hiroshima was a peaceful and the most crowded place before then. I feel goosebumps as I was the one who stand there near the epicentrum on the time where the bombing take place. After 20minutes talk about the history, we move to the other place called Hongawa elementary school. I saw many of the memorial things at this school. They had a ceremony outside the school before the explosion happened. Imagined all the students just gone by this. All the students' hope just gone, just disappear, hopeless. I saw scribble around the blackboard near the stair. They was hopelessly trying to find their parent before the last deep breath. It was a tragical moment that happens in a blink of time. I felt pressured by imagining all these students' suffering back then. After that, we walked around the street and we saw many of the street's name those written in the stone which I thought it was so interesting. Then, we move to take a buffet lunch at the restaurant recommended by Mr Tachibana (P.S: Feel energized and full by the delicious food here)

After lunch, we move again to the Radition Effects Research Foundation (RERF) near the 陸軍 Cemetery. I couldn't imagine that almost 500 soldiers that died back then, buried in this place. I just can hope once again in my heart that I am so thankful to God that we live in a peaceful place now. Then, we walked to the research centre to see many of the chemical science stuffs that I don't understand how the process was. I saw many of the sophisticated machine. When we want to go back, we met one researcher there. And we proudly said that we are UNESCO to see how this foundation takes time to make a lot of research. We went back home, then we ate delicious Hiroshima Okonomiyaki at Okonomiyaki Mura. (PS:さすが広島であったからこそ、お好み焼きめっちゃ美味しかった).

At 20.00 we arrived hotel, and the discussion began again!!

Lesson learnt: I am not good at remembering the history when I was in my high school, so I just only have 5% of this knowledge. But after I saw many historic place today, I learnt

many many things by seeing, feeling, communicating with the members. We share many ideas that I couldn't write it here. Cause we just can imagine by ourselves abstractly. But I learn almost 80% maybe about how the past happened here. I am not only hearing what the teacher said, but also sharing many of new ideas with the other members. (楽しかった！特に板倉さんと目上の先生と話しているときです)
おやすみなさい＾＾

Day 3 Before the war took place moment

I felt sad to leave the hotel early cause we have to catch the only one ferry in morning at 9.00am. So we move to the other place called `Etajima Island`. We went to soldier school here. We took the tour by one of the soldier here and went to the accessories shop inside. Eric, one of the Unesco members, found one of the most interesting things inside. He told us that he hate one of the things inside.. The japanese flag before the war end. We saw many of the good stuffs there, but we find many of the same flags inside the stuffs. So he said that he felt sad and confusing about the feeling when he saw the flag. It remember us about the tragic past in Japan. (ただ面白いだけです)。

So after all the explanation made by the soldier, we are all finished the study tour in Etajima. The next place was the most exciting place! `Miyajima Island`. I never been here before so I hope to eat as much as momiji manjyuu in this place. Although last night was the end of our study trip, we just can remember all the happy memories we made here. I am feeling thankful for Unesco members to make such a good learning chance to me. I hope that I can go somewhere to learn something new again with Unesco members. I hope all living beings are in peace and be happy.

「平和の風」　Eric Yan

The trip was no doubt a unforgettable experience. Not only I had the chance of actually going to southern Japan and appreciate its fantastic views culture and culinary, as I also got to understand better the feeling of Hiroshima's people regarding the events occurred during the second world War in Japan.

On the first day we went to the atomic bomb memorial, which was really intriguing and made me more aware of the tragedy and suffering of people after the unfortunate happening in Hiroshima. After that we were able to have a debate with Hiroshima high schoolers about many themes, seeing their point of view and what they were taught compared to Tokyo was rather interesting.

On the very next, still in Hiroshima, we went to the peace memorial park and saw many origami crane art from all over the world gifted to Hiroshima as a symbol of peace. In fact that's one of the thing that impressed me the most, how the city after getting completely devastated not only got back to its feet as it also overcame all struggles and became a symbol of peace to the world. After that we went to a American base in which is said to collect data and do some research on radiation effects on people. Nevertheless, it seems that beyond that, they're "putting an eye" on the Japanese as well since they felt slightly confronted when deeply questioned. Later that day we ate the momijimanju, which is a typical scack from Hiroshima. Not limited to we also ate Hiroshima's biggest

pride, its okonomiyaki. Which sure represent the best of Japanese cuisine.

On the third and last day of the trip, we headed to a island called Etajima and a navy school. I couldn't understand really well because it was all in Japanese. Nonetheless the feeling of the families receiving the letters of the kamikaze knowing that they won't return must have been devastating. Despite all of that, how they portrayed the survivors and the ones who escaped the war as weak just demonstrates that they need to consider more about the past and it's actions. After that we went to Miyajima Island and saw another Unesco's world heritage. That place is astonishingly beautiful and full of deers too. We walked around the place, ate some oysters, saw some cherry blossoms and at night had a exchange of our overall final thoughts and impressions.

I'm really grateful to have had the opportunity to go on this amazing trip and had learned so much about so many things. Seeing the city of Hiroshima well and alive made me happy and hopeful towards the future. I as a foreigner that came literally from the other side of the world was astonished to see how little the Japanese high schoolers knew from their own history, but thanks to programs like that they were enlightened and got to know many things which makes me glad. Still, one's must never get contented and limited to what is given, instead always pursuit more knowledge.

「これから先も平和な未来へ」　Shu Ma Wa Thein

この間の３泊４日の広島旅行はすごく楽しかったです。確かに、楽しことはもちろん、他に色々学べることがいっぱいでしたので本当に良かったと思います。

最初の日には広島原爆ドームに行きました。そこには当日原爆された被爆者の墓などがおり、原爆ドームが見られます。そして、千羽鶴が一杯飾ってるのが見られて、感動しました。平和を願った人々の希望がこんなに大きいのが分かりました。そのあとは、原爆の博物館に行きました。そこには、絵や写真や動画などを見せております。当時の被爆者がどんな風に被害を受けられたか、戦争の恐ろしさ、平和がない世界の恐ろしさ、原爆の恐ろしさが分かりました。

次の日には当時の爆破くされた小学校の所へ行きました。当時は学生たちが集めて、朝の Assembly をやってたそうです。生き残ったのは二人しかいなかったそうです。爆発された小学校はそのままで置いてあります。

ところで、原爆場は今は公園になり、当時は原爆された注目の所には韓国人の軍士もあったそうで、今は韓国人のための墓も記念として置いてあります。

広島町の全体的を見られる坂を登ってみると、そこには戦争で無くした軍士達の墓が置いてあります。

広島の日本アメリカの研究センターにも行きました。そこには被爆者の研究をやってるそうです。

日本の当時のロシア海軍を潰した海軍の博物館にも行きました。そこには当日、戦争で参加される、命を亡くされた少年の名前が書いており、残念な気持ちになりました。

今回の旅行を通して、平和の大切さが分かりました。そして、戦争の恐ろしさを分かりこれから平和を守ろう、平和をもっと作ろうと思いました。

「Why? Why? Why?　2019 Hiroshima」　板倉 徳枝

２１回目の広島ＳＴは素晴らしい参加者にめぐまれ想像以上に多くの学びと経験を得た。初めて広島を訪れる参加者がほとんどで、その上４名の外国からの参加者/視点を得て夜の研修会の幅広い意見交換は多くの課題を与えられ、皆、広島で、深く、深く真剣に考える機会を持つことができた。

私にとっては２１回目にもかかわらず、疑問の多い毎日だった。

第１日目の疑問：なぜ原爆資料館の改修工事はまだ終わらず、このように長い時間がかかるのか?　一方でオバマ大統領の訪問により多くの外国の方々が資料館を訪れている。工事フェンスに囲まれる資料館を見るのはもううんざりした。　一体いつになったら全館を見学出来るのか?

２日目の朝、広島ユ協の亀井さんからお電話をいただき、今日”かき舟’の裁判があること聞いた。“かき舟‘は原爆ドームのすぐそばに渓流しているステキなレストランだ。この一艘だけが元安川で営業している。それはミステリアスなことで､反対する団体が裁判を起こしている。その裁判の全貌を理解するには時間が足りなかった。裁判は結審で終わったそうだ。ということは？　わからない。そして午後になって訪れた放影研(旧 ABCC). ここは疑問の宝庫だ。その大きな理由は私たちに本当のことを伝えてくれていない、まあ、伝えられないからだろう。

３日目に私達は江田島にある海上自衛隊第一術科学校をまた訪れた。　事前研修でブラジル人のエリック君から旭日旗を使うとは、と大きなクレームをされた。海上自衛隊のすべての艦艇は公海を航海するときはこの旗を揚げなければならない。それが世界のルールだからだ。そのことをエリック君に納得してもらうためとても多くの勉強をした。３日目の旭日旗に関する疑問は江田島で解消された。よかった。江田島で見学を終えた私達はいつもいつも優しく迎えてくれる宮島へ到着し、本当にほっとした気持ちになった。厳島神社の大鳥居は平和の象徴のように堂々と海の中にたっている。美しい、とても美しく。

グーグルで、私が若かったころによく聞いた歌を見つけた。

『 What have they done to the rain? 』

―　雨をよごしたのは誰　―

By Malvina Reynolds

Just a little rain falling all around
The grass lifts it's head to the heavenly sound,
Just a little rain, Just a little rain,
What have they done to the rain?
* Just a little boy standing in the rain,
And the grass is gone, The boy disappears
And rain keeps falling like helpless tears,
And what have they done to the rain
Just a little breeze out of the sky,
The leaves nod their heads as the breeze blows by,
Just a little breeze with some smoke in it's eye,
What have they done to the rain

この歌に関してグーグルで次のような記事がつづいた：

公民権運動の政治活動家 Malvina Reymonds(１９００－１９７８)が１９６２年に作った反核実験の歌です。この歌が作られてから半世紀、当時の人々の”核”への警鐘は原子力発電優先のプロパガンダによってうすらいできました。しかし、今、私たちが失ったものの大きさを考えると最終的に自分たちの手で制御できないものを持つ必要が本当にあったのでしょうか。私は他の人たちの暮らしや生きる土地、命を踏み台にしてまで富や快適さをえたくはありません。

本当にそうだ。まさに私も同意見だ。そして、

２１回目の広島訪問で、私は、なぜ、今日も核兵器は放棄されず、世界のどこかで戦いがあるのか、なぜ、なぜ、なぜ、と一人つぶやく。

「知りたい」　河野 道子

広島 study　tour から帰ってきて１０日たつのに、私の頭の中はまだ悶々としています。今回のツアーも、新しい発見や今まで何となく捉えていたものが明らかになってきたことに、自分自身がどう行動していくか戸惑っているのです。

その中でも広島で活動されている方のお話は、私の視点を広げてくれるものでした。

一人目は、資料館で出会ったボランティアの女性の方です。リトルボーイの縮小模型の前で、現在の核兵器の話になりました。数こそ冷戦時代から考えると少なくなってきましたが、その破壊力は数百倍にもなり、今この時すぐにボタンの押せる状態の核兵器は４０００台もあるということでした。そして「この世界に４０００個所も、今狙われているところがあるんですね。」という言葉に愕然としました。そんなに多くの場所に憎しみがあるのかと。

広島の原爆投下時は、リトルボーイを積んだエノラ・ゲイには乗組員が１２人乗っていました。他にも先導機や他の爆撃機も飛んでいました。あのキノコ雲を撮った科学者も飛行機に乗っていました。だからこそ、そこにはあらとあらゆる感情が入り乱れていたことでしょう。戦後、精神に支障をきたした米兵もいました。けれど今はボタン操作一つでことが成し得るのです。そこには人間の感情はあるのでしょうか。

二人目は被爆者の原田浩さんで、ここの館長をされていた方です。「今原爆の事実が風化されようとしている。」と危機感をもって話されていました。広島駅で被爆し、辺り一面たちどころに火の手があがったそうです。それは、倒れている人のぶよぶよした内臓に足がのめり込んでも走り続けないと火の手が追ってくる状態でした。半ズボンの足だったので、その感触が伝わりましたが、この人を踏みつけていかないと前には進めないと思い、逃げたそうです。そのにおい、感触は忘れようとも忘れられないものだったと話していました。

だからこそ被爆者の「二度と繰り返してはならない。」という思いを受け止めて、活動しているそうです。「絶対あってはならない。できることから行う。日本政府に働きかける。」と強い語調でおっしゃっていました。

三人目はピースボランティアの橘さんです。今回橘さんは「原爆は落とされる必要がなかった。」を何度となくおっしゃっていました。５、６年前にアメリカの映画監督オリバーストーン氏が来日して「原爆投下は正しかった　というのはアメリカ人が創作した神話にすぎない。」と話していました。そしてアメリカが日本に原爆を投下した本当の理由は「アメリカが本当の敵と考えているのはソ連だということをわからせるためだった。」と主張していました。そして同じことを、橘さんも話していました。やはりこれが事実だったのでしょうか。第二次世界大戦中、連合国の中でも、資本主義アメリカ対社会主義ソ連の対立が始まり、アメリカもソ連の自分たちに有利なように日本との戦争を終わらせたいという考えが強まってきました。アメリカは莫大な予算を使い原爆を作った以上、それを使って戦争を終わらせないと国民の理解を得られないということも、理由の一つになっているというのです。

その時の日本はもう戦う力がありませんでした。それなのに原爆が投下されたのは、核兵器によってソ連を圧迫し、その後の核軍拡競争へと突き進むアメリカの政策だったという事なのです。

それからアメリカとソ連は核兵器を作り続け、１９８０年代冷戦状態の真っただ中の最中、二つの国で合わせて 60000 発以上を所有していたのです。

橘さんは「平和を語るときには、歴史の共通認識が大事だ。いいことも悪いことも正しく知ることで話し合いが成立し、一つの方向が見い

だせるのかもしれない。」と話していました。

The truth behind the facts
事実の後ろにある真実

私はそれを知りたい。そして考えて、自分のできることを行動していきたい。
今、強くそのことを思っています。
まず手始めにやることは、ひばくしゃ国際署名に署名します。
なんとよく見ると、我が家の近くにあるコープみらいでも取り組んでいることがわかりました。できることはこんな近くにすぐにありました。そして家族にも友達にも話して実行していきます。
そして、事実の後ろにある真実を見極めるために、いろいろな角度から物事を捉え、考えていきたいと思います。
ツアーに参加された４人の外国人の方の戦争に対する考え方、青年部の若い皆さんの誠実さに心が動かされた日々でした。そして何よりも企画、運営してくださった板倉先生、協会関係者の皆様、橘さん、ユネスコの若い青年部の皆様方、本当にありがとうございました。

「今こそチャンス！」　西野 裕代

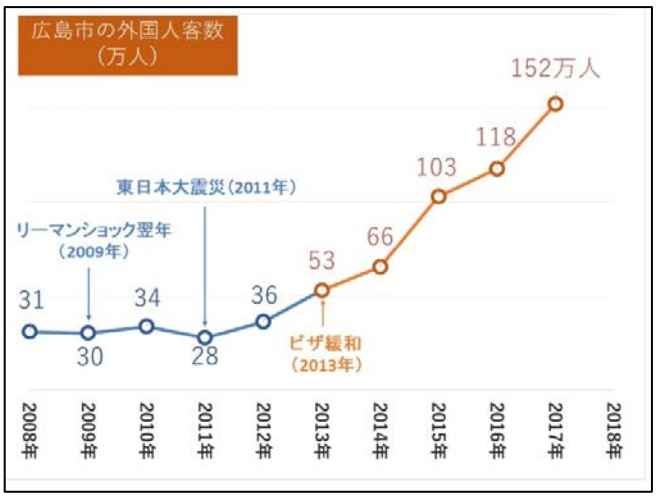
このチャンスを活かせよニッポン！！という気持ちでいっぱいになった今年の広島。例年通り、原爆ドームや平和記念公園ではツアーガイドの説明を熱心に聞き入る外国人団体に幾度もすれ違った。そして、疑問がふつふつと湧いてきたのだ。日本国内の観光ならば他にもたくさん良いところがあるのに、はるばる広島を訪れ、いったい何を見て何を感じて帰っていくのだろうか？ 私達がツアー中に多くの外国人を目撃する場所といえば、平和記念公園と原爆ドーム、資料館、宮島…せいぜいその程度だ。お好み焼き屋で隣席となった欧州の若者に声を掛けると、案の定、本川小学校の存在は知らないという。原爆ドームのすぐそばにある本川小学校は、「被曝の証」として校舎が保存されていて、生々しい原爆の爪痕をリアルに感じることができる場所だ。彼らに本川小学校の英文パンフレットを渡すと、とても興味を示し、「早速、行ってみる！」と満面の笑みを浮かべた。
そうか！原爆に興味を持って広島を訪れる人々は、何を見るべきかの情報が足りないのだ。これは、日本人観光客にとっても同様に当てはまる。
手前味噌にもなってしまうが、私達のスタディーツアーの行程を、たくさんの人に辿って欲しいと思っている。特に、原爆ドームから２km ほど、桜の名所である比治山に佇む放射線影響研究所（以下、放影研）は是非とも多くの人に訪れてもらいたい施設だ。ここは何十年にも渡り、十数万人の被爆者の身体を追跡調査している世界に類を見ない研究所なのだ。
放影研は「山」と呼ばれ、現在も調査に応じる被爆者が通っている。市民が無断で立ち入ることは許されないというが、事前予約をすれば、施設の一部を見学することができる。ただし、広報担当者の案内がつき、診察を受けている人とは一切接触しないように配慮されているので、毎回、最も知りたい部分は想像することしか出来ずに悶々としていた。しかし、さすがのネット社会である。秀逸な取材映像を見つけたので紹介しておきたい。観れば、原爆投下はどんな目的で行われたのか、広島や長崎の人々に何が起こり、現代に至るまで水面下でどのような困難が彼らに降りかかっているのかが明確となる。

RCC（中国放送）開局 60 年特別番組
H25 日本民間放送連盟賞　番組部門テレビ報道番組最優秀作品
『ヒロシマの山』～葬られた内部被ばく調査～
https://www.youtube.com/watch?v=1vNBLu7UAeA

また、神風特攻隊員たちの遺書や遺品、多くの史料が展示されている、江田島の旧海軍兵学校（現海上自衛隊幹部候補生学校）にも、ぜひ足を運んで欲しい。
ガイドブックに大きく載っている観光スポッ

トでは、残念ながら核兵器の真の恐ろしさは伝わりにくい。結果しか分からないからだ。その背景に何があるのかを知らなければ、真の恐怖は想像できないと思う。

オリンピック、万博開催を目前に控え、日本を訪れる観光客はますます増えてゆく。はるばる広島まで足を運んでくれる人達には、心に響く観光をして欲しい。同時に、私達自身が学び、説明できるようにならなければならないとも思っている。時間はない。そして、心を震撼させられた彼らは、必ずネットでつぶやくに違いない。一言のつぶやきが、瞬時に全世界へと拡散されるこのご時世、「今こそがチャンス！」なのだ。



広島市を訪れる外国人観光客数の推移
出典：H&M https://handn-hiroshima.co.jp/

みんなで作った絶品?!カレー

3 月生まれの誕生会♪

資料

今年の広島スタディーツアーと時を同じくして、宮内庁から敬宮愛子さまの作文が公表されました。学習院女子中等科を卒業されるにあたり、記念文集に寄せられた全文をご紹介いたします。

「世界の平和を願って」　敬宮愛子

卒業をひかえた冬の朝、急ぎ足で学校の門をくぐり、ふと空を見上げた。雲一つない澄み渡った空がそこにあった。家族に見守られ、毎日学校で学べること、友達が待っていてくれること…なんて幸せなのだろう。なんて平和なのだろう。青い空を見て、そんなことを心の中でつぶやいた。このように私の意識が大きく変わったのは、中三の五月に修学旅行で広島を訪れてからである。

原爆ドームを目の前にした私は、突然足が動かなくなった。まるで、七十一年前の八月六日、その日その場に自分がいるように思えた。ドーム型の鉄骨と外壁の一部だけが今も残っている原爆ドーム。写真で見たことはあったが、ここまで悲惨な状態であることに衝撃を受けた。平和記念資料館には、焼け焦げた姿で亡くなっている子供が抱えていたお弁当箱、熱線や放射能による人体への被害、後遺症など様々な展示があった。これが実際に起きたことなのか、と私は目を疑った。平常心で見ることはできなかった。そして、何よりも、原爆が何十万人という人の命を奪ったことに、怒りと悲しみを覚えた。命が助かっても、家族を失い、支えてくれる人も失い、生きていく希望も失い、人々はどのような気持ちで毎日を過ごしていたのだろうか。私には想像もつかなかった。

最初に七十一年前の八月六日に自分がいるように思えたのは、被害にあった人々の苦しみ、無念さが伝わってきたからに違いない。これは、本当に原爆が落ちた場所を実際に見なければ感じることのできない貴重な体験であった。

その二週間後、アメリカのオバマ大統領も広島を訪問され、「共に、平和を広め、核兵器のない世界を追求する勇気を持とう」と説いた。オバマ大統領は、自らの手で折った二羽の折り鶴に、その思いを込めて、平和記念資料館にそっと置いていかれたそうだ。私たちも皆で折ってつなげた千羽鶴を手向けた。私たちの千羽鶴の他、この地を訪れた多くの人々が捧げた千羽鶴、世界中から届けられた千羽鶴、沢山の折り鶴を見たときに、皆の思いは一つであることに改めて気づかされた。

平和記念公園の中で、ずっと燃え続けている「平和の灯」。これには、核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けようという願いが込められている。この灯は、平和のシンボルとして様々な行事で採火されている。原爆死没者慰霊碑の前に立ったとき、平和の灯の向こうに原爆ドームが見えた。間近で見た悲惨な原爆ドームとは違って、皆の深い願いや思いがアーチの中に包まれ、原爆ドームが守られているように思われた。「平和とは何か」ということを考える原点がここにあった。

平和を願わない人はいない。だから、私たちは度々「平和」「平和」と口に出して言う。しかし、世界の平和の実現は容易ではない。今でも世界の各地で紛争に苦しむ人々が大勢いる。では、どうやって平和を実現したらよいだろうか。

何気なく見た青い空。しかし、空が青いのは当たり前ではない。毎日不自由なく生活ができること、争いごとなく安心して暮らせることも、当たり前だと思ってはいけない。なぜなら、戦時中の人々は、それが当たり前にできなかったのだから。日常の生活の一つひとつ、他の人からの親切一つひとつに感謝し、他の人を思いやるところから「平和」は始まるのではないだろうか。

そして、唯一の被爆国に生まれた私たち日本人は、自分の目で見て、感じたことを世界に広く発信していく必要があると思う。「平和」は、人任せにするのではなく、一人ひとりの思いや責任ある行動で築きあげていくものだから。

「平和」についてさらに考えを深めたいときは、また広島を訪れたい。きっと答えの手がかりが何か見つかるだろう。そして、いつか、そう遠くない将来に、核兵器のない世の中が実現し、広島の「平和の灯」の灯が消されることを心から願っている。

おわりに

悲惨な写真や映像を見ることで戦争の恐ろしさを理解したとしても、感覚的には現実味のない遠い過去の話と捉える戦後世代が多いのではないでしょうか。私自身もその一人でした。しかし、何度か広島を訪れる中で、次第に大事なことが見えてきた気がしています。それは、当時の一人ひとりの身に何が起こり、どんな苦しみの中で必死に生きようとしたかを想像すること。被爆建物に足を踏み入れてどんなに怖い思いだったかを全身で感じ、奇跡的に残された伝言から必死で身内を探す心中を察すること。このような想像力をフル稼動させた経験こそが、戦争は恐ろしいという現実感に繋がっていく大切なことだと感じています。

戦争は決して遠い昔の話ではなく、今この瞬間も苦しみの中に置かれている多くの人達がいます。さらには、第三次世界大戦勃発まで危惧されている現代においては、私達が想像力を持つことがますます重要となるでしょう。このスタディーツアーの真髄は、参加者が何にも代えがたい現実感を得られることにあると今、改めて実感しております。

長年に渡り、本ツアーをお支えくださっている皆様に深謝申し上げます。このような活動が多くの方々に広がるように願いつつ。

杉並ユネスコ協会　西野　裕代

【お世話になった方々】

広島ユネスコ協会
第９代広島平和資料館館長　原田弘さん
第10代広島平和資料館館長　畑口實さん
ピースボランティア　橘光生さん
杉並区職員労働組合組合
広島大学附属中・高校　藤原隆範教論

第 21 回広島スタディーツアー報告書
2019

発行日	2019 年 5 月 1 日
発行	杉並ユネスコ協会
URL	http://suginami-unesco.org/
青年部 Instagram	sugiyu_youth

©Shoko Fujiwara 2019